

はじめに

「子どもが勉強してくれない」、「子どもがどういいう将来を考えているかわからない」といった相談を保護者の方からよく受けます。

中学生という時期は、まだまだ未熟な年齢で、だけど自分を一人前として扱ってほしいと思う、そんな多感な時期になります。

一人前としてすべて子どもに任せていて、気づけば選択が手遅れになることもあれば、逆に過剰に保護者側の考えを押し付けると、親子の溝ができてしまつて関係がぎくしゃくしてしまうこともあるでしょう。

しかし、中学生という時期は、まだまだ未熟な年齢でありながらも、子どもの将来を大きく左右します。学歴が非常に重視される日本において、最終的に将来を大きく決するのは大学受験になりますが、大卒学受験はあくまで結果であり、中高生活という6年間のプロセスの結果であるという点で、中学生の6年間は将来を考えてもとても大切な6年間だと思います。

実りのある中高生活をつくり上げるためには、本人に合った学校や部活・塾などを選び、本人に合った環境をつくり上げることが一つの手だといえるでしょう。

しかし、結局そうした環境が本人に合っているかは本人次第です。

それは時と場合によって変わるものですし、中高生という未熟な時期であるからこそ、本人の居心地のよい中高生活と実りのある中高生活とがずれてしまうこともあります。

そうした中で、子どもが実りのある中高生活をつくり上げるための処方箋として、本書では親子関係に注目してみました。

保護者は子どもにとって一番身近な大人であり、子どもを一番身近で見守れる存在であるからこそ、その関係性を結び直すことで、中高生が実りのある中高生活を送るためのヒントを書くことができるのではないかと思ったのです。

理想の親子関係を考えたとき、今回キーワードとしてセコンドという言葉を挙げました。

セコンドとはボクシングの世界にある用語で、リングで戦うボクサーをラウンドの間はリングの外か

ら見守り、1ラウンド終わるごとに選手のそばに駆け寄って、外から見ている気づいた相手の弱点を教えたり、傷の手当てをしたり、時には心の折れそうなボクサーを言葉で鼓舞したりします。

彼らは、ボクサーが精いっぱい試合ができるように、一歩引いたところから熱く冷静にボクサーを見つめる、ボクサーにはなくてはならない心の支えです。

このボクサーとセコンドという関係性こそ、僕たちが考える理想の親子関係でした。

本書は個別指導塾で教鞭をとる6人の学生講師が、「理想の親子関係とは何か」という問いに正面から取り組んだ、一つの「意見書」であり一つの「参考書」です。

時に「学生⇨子ども」としての目線から、それぞれの中高生活を振り返ることで、時に「講師⇨生徒の進路・学習を見守る立場」から、塾で教鞭をとってきた経験を活用することで、理想の親子関係を提案するという、視点の一味違ったものとなっていると思います。

「子どもにこう接する『べき』』というものではなく、「保護者にはこう接して『ほしい』』というものです。

本書を通して、子ども目線からの「理想の親子関係」を、講師としての経験を交えてお伝えできれば
と思います。

御茶ノ水個別指導塾 NEXTEP

学生講師 執筆者